寄せ太鼓

北九州市立長崎街道木屋瀬宿記念館
運営協議会 広報部会
北九州市八幡西区木屋瀬三丁目16番26号(〒807-1261)
TEL 093-619-1149
FAX 093-617-4949

こやのせ座「能」

こやのせ座 親子お能教室

「こやのせ座」三月の恒例行事 第9回「こやのせ座・能」ならびに「こやのせ座・親子お能教室」が 三月十九日に執り行われます。

能楽師は シテ方が観世流の森本哲郎氏。 ワキ方を宝生流の坂苗 融氏。 演目は仕舞が〔花筐〕〔船弁慶〕 能が〔胡蝶〕。 開演前には現代語訳本を配布の上 森本哲郎氏による解説が行なわれ 初めての方やお子様にも解り易くご鑑賞戴ける事かと存じます。

又 「親子お能教室」の方は次代を担う小・中学生が日本の古典芸能「能楽」を実体験する事により 日本の歴史・文化に対する理解と興味を深める事を目的として 広く一般に公募の上 無料にて開催して居りますが 当日参加した子供たちには 「こやのせ座」ボランティアによって（南蛮渡来のカレー丼）なども振舞われ 知識を広め食欲に満ちた一日を「こやのせ座」で過ごし戴く算段となって居ります。尚 一般入場者や「親子お能教室」参加父兄の方を対象に 軽食バザー（ウドン・南蛮渡来のカレー丼・コーヒーなど）を行って居りますのでお手軽にご利用下さいませ。

こやのせ座運営部会長 紅屋泰助

初体験で緊張ぎみの親子

■「こやのせ座・能」
3月19日　開場13時30分　開演14時
チケット：一般3000円・中学生以下1500円

■「親子お能教室」
3月19日　11時より
【問い合せ先】北九州市立長崎街道木屋瀬宿記念館
TEL〇九三ー六一九ー一一四九　FAX〇九三ー六一七ー四九四九

企画展

「郷土・木屋瀬の絵師たち」（予告）

みちの郷土史料館は、平成23年1月で開館10年目を迎えました。そこで、2月11日(金)～3月21日(月)まで、企画展示室におきまして、木屋瀬出身の3人の絵師（麻生東谷・新谷鐵儁・高倉梅原斉）についての企画展を開催予定です。麻生東谷の作品につきましては10年振りに展示されるものもございます。ご来場をお待ちしております。

第9回 木屋瀬いろは歌留多大会

今年で第9回を迎えました【こやのせ座】正月恒例の〔岩井屋不彫さんの木屋瀬いろは歌留多大会〕は 近年珍しい降雪に見舞われましたが 総勢二百名以上の参加者で盛大に執り行われ〔こやのせ座運営部会ボランティア〕の用意したウドン・ぜんざいの接待も品切御免の大盛況でございました。

入賞者（敬称略）は【小学生の部】優勝：上野 遼（木小4）・準優勝：梅本 涼（木小5）・第三位：宝田美陽（木小2）・同：宝田太陽（星ヶ丘幼稚園）【一般の部】優勝：篠原 実（木中3）・準優勝：向高那実（木中1）三位：中尾航介・同：倉田明歩と云う結果でございました。

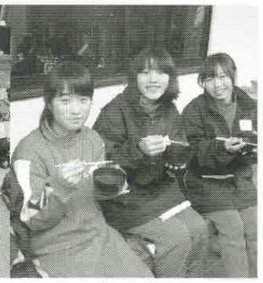
木屋瀬ならではの歴史・風物などを多彩に織込み考案された〔岩井屋不彫さんの木屋瀬いろは歌留多〕 今回ご紹介するのは ○は はぜ黄櫨のき木 さかい境が ぐんさかい郡

【説 明】黒田藩（筑前の国）では黄櫨蝋の生産が藩の重要産業の一つとして奨励されていた為 木屋瀬にも黄櫨の木が多く植えられていましたが郡境の黄櫨の木とは遠賀川土手扇天満宮と寿命との間 丁度 鞍手郡と遠賀郡とを分ける境の水路際に植えられていた黄櫨の老木で 昭和の中頃まで何本か残っていたように記憶しています。

それでは こよなく郷土木屋瀬を愛された作者「岩井屋不彫さん」の人柄を偲びつつ〔第九回木屋瀬いろは歌留多大会〕報告の〆といたします。

こやのせ座運営部会長 紅屋泰助

歌留多大会での一駒


ぜんざいを食べ笑顔が…

鞍手郡植木村庄屋甚五郎・組頭伝蔵 鞍手郡下新入村庄屋伊七・組頭十左衛門 乍恐申上ル口上之覚 その六

木屋瀬みちの郷土史料保存会 松尾 良美

前号の見出しに、ゴシック体の太文字で、"合羽の行方は！何れの駄荷にか？"と掲げてあった。長崎奉行の小姓衆梅垣市三郎なる者の合羽紛失の件については、今回の表題の通り、合羽（和紙に柿渋を塗ったもの）を含む荷駄を運んだ植木村と下新入村の馬士二人である。前号の口上書は、木屋瀬宿より継立を指示した人馬方と問屋の連名であったが、この度は馬士が居住する助郷村の庄屋・組頭による口上の覚が、郡役所の奉行水野貞之進宛に出されている。

植木村の口上之覚（口答で述べる事を文書にしたもの）の書き出しは、『今般長崎奉行様御下向達当村馬士幸助ト申者無念筋（不注意の件）御座候趣（事情）ニ付相調子之処御家来梅垣市三郎様御荷物弐駄（二頭で荷を積んだ馬）下新入村馬士甚十当村馬士幸助両人ニ而木屋瀬宿御昼所（昼食処）より付送（運搬）飯塚宿所（宿泊）江 参着候…』である。一方の下新入村の書き出しは、『今般御下向御奉行様達甚十植木村馬士幸助御荷物一同飯塚江送り参候始末（送り届けた）相調子候処右御家来梅垣市三郎様御荷物弐駄右両人ニ而木屋瀬御昼所より付送 飯塚御泊所江着仕候処（到着の時）植木村馬士幸助ハ…』と、以上のように両村の書き出しの概要は殆ど同じであった。

"御家来衆之合羽壱枚相見え不申"と紛失が判明した時、合羽がどのような状態で荷造りされていたかについて書きたい。

下新入村は、『飯塚御泊所江着仕候処植木村馬士幸助ハ少し先ニ参相見え不申候間（飯塚宿に到着した時植木村の馬士は先に着いて帰った）御荷物才料衆江引渡候処（荷物を送る駄馬や人足を監督する人）馬桐油ニ括り添有之（馬の背に覆う馬カッパに結んだ）御家来衆之合羽壱枚相見江不申段被仰聞候得共……』植木村については、『飯塚宿御泊所江参着候処下新入村馬士甚十未参不申候（飯塚についた時は下新入村の馬士は未だ到着していなかった）残り荷駄ハ跡より参着候条申上ニ而荷物引渡罷帰申（後程に跡の荷物が届くと答えての帰り途に）急追付シ才料衆ハ（植木村馬士に追い付いた才料人は）下新入村馬士甚十付送荷物引合候処馬桐油ニ結添有之御家来衆之合羽壱枚見不申（後より着いた荷物を照合すると一枚足りないと）被仰聞候得共（荷駄や人足を監督する才料人に言って聞かせられた…）』

このように両村の口上之覚を読むと、合羽の紛失の経過が曖昧である。木屋瀬宿の出立や飯塚宿到着の際に二人が引く荷物の内容と数量が引合（照合）されたか、両方の荷物である合羽は、馬の背に覆った馬桐油カッパにどのように結びつけていたのか不明である。

合羽の紛失で引き帰って、往環筋や宿場内を落としていないか詮議したようだが、果たして宿継で人馬を指揮監督の役目の才料衆は、飯塚宿までの荷くずれ等に配慮していた筈だが、最も此の弐駄は道中が一緒でなく離れ離れになっていたようだ。

結果は、合羽は見つからず才料衆や宿場の人馬方・問屋の町役人が低頭低身に謝り、最終的には紛失の過ちは継立を行った人足・才料衆に責任が問われ、損料や代料（代金）を出す事のお詫びの約定（取り決め）を交わす始末となっている。合羽壱枚の紛失でも、公式の行列に加わる武士勿論、最下級武士に属する足軽や武家の雑役に従事する小人衆迄も、藩主や藩の権威を楯に権柄（おうへい）がましい振る舞いが多かったようだ。

助郷は宿場に常備する人馬が不足する時に、近郷の村々に人馬を負担させる制度であって、往環（道路）の掃除や警備と雑役等が、領民に課した労働夫役である。その為に助郷として継立の人足達の不始末は助郷として出した村々の責任が問われる次第で、庄屋や組頭が事件の顛末を口上之覚として出している。この二通は、植木と下新入の村が所属する触（郡を幾つかに村々の群れに分けた単位）を統括する大庄屋の添状（口上之覚の内容を認めた文）が、左記のように記されている。

【右植木村（下新入村）より御届申上候処相違無御座候以上
上境村大庄屋　加藤太右衛門
植木村大庄屋　香月勘助】

以上の如く、人馬方・問屋を含めた三通りの口上書が奉行所に提出される事や紛失の度に事実の究明が曖昧で、結末は謝罪と弁償に落ち着くのは、当時の武士と町方という時代背景が物語っている。

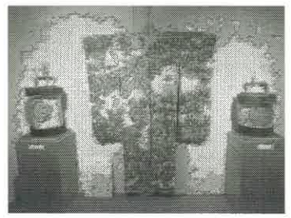
■企画展「女性の装い」展（報告）

平成22年10月16日(土)～11月28日(日)まで開催しました、「女性の装い」展の来場者は九五七名でした。皆様のご来館、誠にありがとうございました。また、ご協力頂いた皆様に厚く御礼申し上げます。

～アンケートより
ご感想の一部を紹介～

・櫛、笄、鏡も昔をなつかしむ、その当時の暮らしに思いをはせることが出来ました。母達の時代、祖母達のもこういう暮らしだったのかと。

・古き良き時代をかえりみる事が出来ました。花嫁衣裳だった着物、豪華ですね。華麗の一言です。



■講座「木屋瀬 時代の散歩道」

今年度で8回目となります、講座「木屋瀬 時代の散歩道」を9月17日～10月22日の毎週金曜日、全6回にわたり開催しました。江戸時代の木屋瀬にあったピータラ飴と関係の深い三官飴や福岡藩の領内接待、木屋瀬の旅籠をテーマにした講義や、木屋瀬をはじめ木屋瀬東部（野面・笹田・金剛）や佐賀の長崎街道見学を実施しました。今年度は55名の方が大変熱心に受講して下さり、木屋瀬の魅力を再発見していただけたようです。

塚崎宿にて

野面・長泉寺にて

シリーズ　筑前木屋瀬宿

第二十一回　神仏めぐり　新築の弁財天

木屋瀬宿の弁財天は、須賀神社の裏の通り、長徳寺から祇園町へ抜ける小路の途中にあります。古くは長徳寺の境内にありましたが、明治二十四年の大洪水で荒廃してしまいました。そこで、当時本町に居られた酒造業の岩尾石五郎さんが、大正十一年有志と計らい長徳寺の飛び地境内である現在地に再興されました。私が子供の頃は、中秋の月見を兼ねてお祭りが行われていましたが、年月と共に廃れ、お堂も荒れ果てお参りする人も絶えていました。平成二十年に、岩尾家に縁りのある木原勝子さんが感ずる所にあって、弁財天の新築を発願され布施行として寄進され、同年四月に第三十二世長徳寺住職定誉英信上人のもとで、慶讃落慶法要が行われました。木原さんは、日頃は大変清貧な生活のようでしたが、須賀公園に時計台を一塔と須賀神社にも多額の金額を奉献されています。弁財天は七福神の一神ですが、一般的に七福神は、毘沙門天、大黒天、福禄寿、寿老人、布袋尊、恵比須、弁財天の七神をいいます。

福神の数を七に限ったのは、七難七福の仏教経典の文句によるものと思われます。福神信仰は室町時代から始まり、特に「一年の計は元旦にあり」として、江戸の庶民の間で招福の行事として、盛んに七福神めぐりが行われました。木屋瀬宿にもそのような風習があったのかもしれません。

さて、弁財天ですが、七福神のなかで只ひとり、女性の神様で弁天さまとして親しまれています。元来はインドの神様で、川を神格化した女神です。とうとうと流れる川が、弁舌や音楽を連想させ学芸や学問の神としてわが国に仏教と共に「弁才天」として入ってきましたが、「才」が「財」の音に通じることから、財福の神としての性格も付与され信仰されるようになりました。その後、日本の代表的海神である、宗像三神の市杵島姫命(いちきしまひめのみこと)や食物神の宇賀神とも習合し、漁業や農作物の守り神として崇められるようになりました。しかし、元来の水の神の性格から、水辺や島、池などの場所に祀られることが多く白蛇を使者としています。

弁財天信仰も長い年月の間にいろいろ変遷してきていますが、仏像の形像にもそれが、現れています。琵琶を持つ裸身像や、二本の手に宝珠、宝剣をもった姿や、木屋瀬の弁天様のように八つの手に宝珠、印鑰、弓等を持ち頭に鳥居を頂き白蛇を冠し、二面の顔を持つ弁天様もあります。弁財天は、人々のあらゆる願いを叶え、心配を取り除いてくれる万能の女神として長い間庶民の間で崇められてきました。

木屋瀬の弁財天像

新築の弁財天

弁天のこの地に鎮座ますかぎり
幾久しくも栄えあれ
木原勝子

木原勝子さんはこの詩を歌碑に残し、一昨年浄土へ往生されました。

合掌

本町　野口靖彦

伝統行事　平成22年度　子供ゑびす頭

寒さにも負けず、元気に頑張りました！

12月4日、5日と須賀神社にて9名の児童による子供ゑびす頭が行われました。元服の意味をもつこの祭りは、昔は数えの十一歳、現在では小学校4年生の男子を頭(かしら)と呼び、頭が主役となってゑびす祭りが執り行われます。9名の頭の名前が披露された紅白の幕を笹山笠に張り、二日間に渡って町内を曳き廻しました。師走ではありましたが天候にも恵まれ、9名全員が元気一杯山笠を曳き、社宝を持って御神幸行列で町内を廻りました。二日目は山笠を曳いた後、祝い膳(江戸時代には大名に振る舞われた物)につき、滞りなく二日間の行事を終えることができました。今回、子供たちがこの行事を経験したことで、木屋瀬の伝統文化に関心を持ちながら育っていくことと思います。最後になりますが、この頭の行事の準備から、本番終了まで、ご協力頂きました皆様方、ご芳志を頂きました皆様方に、平成二十二年度子供ゑびす頭関係者を代表致しまして、心よりお礼申し上げます。

代表世話人　赤松　直木

平成22年度子供ゑびす頭の面々

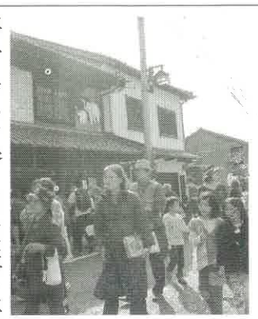
第18回　筑前木屋瀬宿場まつり報告

〔文化の薫るまちづくり〕所謂〔地域の歴史と文化を活かした地域の活性化の推進〕と云う趣旨・目的で始められ18回を迎えた「筑前木屋瀬宿場まつり」ですが　今回は天候にも恵まれ　恙なく執り行う事ができました事をご報告申し上げます。

此も偏に　十八年間の永きに亘りご支援ご協力戴いて居ります木屋瀬地域住民の皆様方の地域活動に対するご理解の賜であると感銘し厚くお礼を申し上げます。

尚　開催費用につきましては　前年度までの繰越金が八四二、一六〇円　本年度収入が一、二九六、九〇〇円(寄付金・祝儀)＋三五六、五八〇円(市助成金)＋一八、二五三円(雑収入)の合計一、六七一、七三三円に対しまして　支出合計が一、六九五、九四三円(単年度収支は二四、二一〇円の赤字)で次年度への繰越金が八一七、九五〇円と云う報告が昨年12月14日の実行委員会反省会に於いて為されて居ります。

私「筑前木屋瀬宿場まつり」開催の為　年に一回結成される実行委員会の末席を汚させて戴く者として「寄せ太鼓」の創刊以来寄稿させて戴いて居りますが〔筑前木屋瀬宿場まつり〕の18年間の歩みを振り返り私見を申しますと　主催団体の変遷に伴う基幹企画の変更など紆余曲折を経ながらも　木屋瀬住民共有の歴史的文化財産である「宿場踊り」を中心に〔伝承盆踊りの祭典〕としての発展性を目指す　地域の特性を活かした他に類無き〔まちづくりイベント〕との評価も高い行事へと育って参りました事を喜ばしく思います。しかしながら皆様のご支援・ご協力に答えるべき使命を担う実行委員会の近年の実情に感じますのは　恒例化した行事内容に甘んじただ惰性で回を重ねて形骸化された実績を積むのでは無く　第7回までの開催予算の半減と云う不条理な状況にも拘わらず〔本物志向の継続〕と〔自主企画・自主運営〕の信条と〔熱き思い〕で取り組みを始めた第8回からの実行委員会創設時の原点に立ち戻り　郷土木屋瀬の〔未来へと続く町づくり〕と云う明確な課題に向けて　心新たに取り組む責務を覚えるのは私だけでしょうか？



第18回筑前木屋瀬宿場まつり実行委員会
副実行委員長　紅屋泰助

木屋瀬(五)

わたしの昔話

往時太宰府は、海外との門戸であった博多港「那の津港」を管轄し、他国との出入国処理を初め重要な任務をもっていた。そうした事務を施行する諸々の館や「筑紫館又は鴻臚館」と呼ばれていた迎賓館等も現在の福岡市平和台を中心とした広範囲に置かれていた。

京師よりこの太宰府に通ずる道を大路と呼び大路は国内ではこの道だけであった。後に五大街道と呼ばれるようになった道もこの時代では中路であり、その他の国内の道はすべて小路と呼ばれていた。木屋瀬はこの国内ただ一つの大路に町の中央を貫かれている宿駅であった。

宿駅の主な業務は人や荷物の輸送等を迅速に行う事であり、その為に最も必要なものは何と言っても駅馬であった。そこで駅馬を常駐して置かなければならなかった。この事に設けられた規定に依ると、大路の宿駅では駅馬二十匹(疋)、中路の宿駅では十匹、小路の宿駅では五匹となっている。

木屋瀬は大路の宿駅として、その業務を完遂出来るように整っていたと考えられる。この頃からの馬舎は下町に置かれ、馬舎には厚板が敷かれていたので、多くの馬の足踏みの音が夜通し絶えなかったようである。最後の馬の守、藤二郎さんの名を残すだけで今は跡形もない。

木屋瀬宿駅の西を流れている遠賀川の流域は、太宰府観世音寺の縁起によれば、観世音寺の施入地となっていて、奇進物専用の平駄船が時には上って来る事もあったようである。木屋瀬大川の浜より、寄進の砂や木材を積み込んだ事もあったようである。

辯阿上人が、嘉穂の寺に建立する五重の塔の用材を、木屋瀬大川の浜に引き上げて、ここで木取りをする為に多くの作業木屋を作った。この事が木屋瀬の地名になったとか。木取りがすんだ用材を嘉穂に向けて陸送しているが、この陸送人夫を待ち受けて焚き出しをした。その残飯が塚をなしたのでこの地を飯塚と呼ぶようになったとか。ほのぼのとするお話ではある。

神武天皇がご東征の道すがら芦屋の岡の水戸より来船され遠賀川を木屋瀬附近まで上って来られたと伝えられている。

多くの物語を秘めている木屋瀬大川は石炭産業が石炭を水洗いしていなかった頃までは、水美しく魚貝も多かった。高浜と呼び大浜とも呼んでいた遊ぶに良き砂浜が木屋瀬人の楽園となっていた。今はその片鱗も見えないけれど、木屋瀬をたつきの場とする人達に、爽やかな川筋気質をを培いながら、洋々として流れている。

本町　柴田由美子

柴田豊廣遺稿集より